何故、貧困研究のために文化人類学レヴィ=ストロース・ソシュールの言語論なのか？

文化人類学の視点と貧困研究――**EU の貧困調査と「自然生物性から社会文化へ」**

厚生経済学的には、セン測度（貧困指標）の開発以降、貧困は不平等問題を抱えていると言う規定性に、異論の挟みようが無く、貧困と不平等問題は不可分と言うよりは同値、貧困とは市場経済下では所得不平等問題であり、新しい貧困「社会的排除」は、家族関係、職場関係、地域生活からの排除、社会関係の喪失過程と共に現れる生活困難、不平等問題である。

21 世紀の現在となり、その生活困難の度合い、貧困を測るために、EU は伝統的な貧困測定と併用して、社会調査の総動員的な、その社会の社会文化的な要因を網羅しての個別生活条件の困窮度を測定し、それらの相互関係を通して貧困の様態を把握しながら貧困政策を組み立てる方向のようである。

参）当ホームページ　相対的剥奪指標と社会的排除指標
――欧州 2020 戦略下の社会指標の開発が意味するもの
http://www.mirai21canalnew.com/PDF/Pstructure/twoindex/eu2020sp4.pdf

この EU の手法、生活全分野の把握、その相互作用、それら事実調査を通しての貧困政策発動と言う方向性は、貧困とはレヴィ＝ストロースが『親族の基本構造』の中で言う、人間が自らの命と次世代の継承を求めて身を委ねたであろう社会文化性において、社会関係、人間関係、集団関係の齟齬が、生活困難（貧困不平等）を産み出している構造、不平等問題への対応として、理に適っていると思われた。

厚生経済学的に、貧困不平等と言う人間生活の全て、心理社会的であって、家族生活社会生活全体に及ぶ困難である貧困不平等を、一つの概念「厚生」情報から捉えようとするアプローチでは、それを捉えきれないと言う、アマルティア・センの理解を念頭にすれば、貧困不平等に対応する社会政策を組み立てるには、人間の自然生物性と社会文化性への移行と言う人間理解の構図の中で、貧困と不平等の実相、その影響と広がりと変化の動向を、社会文化性の中身（階層構造、経済活動、地域性等）の相互関連性、その動きと共に捉えるという、システム的な検討が、有効で必要な方法論を提供するのではないかと思われた。

貧困不平等を「生存条件の枯渇」と言う文化人類学的視点から眺めれば、様々な社会調査と伝統的な貧困測定を併用して、それら相互作用を捉え、その組み合わせとしての貧困調査、その上での貧困政策の策動といった、時間軸を持ったアプローチ、EU の手法は、21 世紀に至る貧困研究の到達点、その水準を示していると思われる。

生活全分野にわたる困窮とその相互作用である不平等問題は、そこに生存条件の枯渇という視点を重ね合わせて組み立てる事により、自然生物的生命維持の要求をベースに置きつつ、生活の全分野にわたる困窮である貧困問題と重なり合うところから、その全体像の把握において、レヴィ＝ストロースの「自然から社会へ」という視点と重なりあうと思われた。

文化人類学は社会科学の範疇でありつつ、人間の社会文化性の側からでありつつ、人間の生命、命に係わる現象を焦点化する学問領域でもあろうか。

レヴィ＝ストロース：「専門分野の人類学、神話学における評価とともに、一般的な意味における構造主義の祖とされ、彼の影響を受けた人類学以外の一連の研究者たちとともに、1960 年代から 1980 年代にかけて現代思想としての構造主義を担った中心人物とされる。

なぜソシュールなのか？

ところでレヴィ＝ストロースは、アメリカ先住民の各地に広がる神話、そのストーリー展開について、各地の神話、それら互いのストーリーの各部分各構成要素に注目し、その構成要素間の近似性と相違性の検討を通して、各「神話の中の論理」を読み解いている。神話が各地に伝播する経過において、それらストーリーの中の「項の変化」が認められ、その在りよう、その中に顕れるアメリカ先住民の思考、論理展開の構造を示し出そうとする。

その読み解きにおいて、彼は一つの神話を基準神話として基軸に置いた上で、各神話ストーリーの中のひとつの項（段落）に注目して各神話を見渡し、そのひとつの項を独立した実体として「意識的に把握」した上で、互いの神話の比較を進めている。彼は人類の思考（心的運動・心の動き）の在りようを反映して転回する神話ストーリーとしての想定において、その上で「項と項の差異関係がはたらく無意識の場[1]」を想定し、「無意識のうちにはたらいている二項対立群」の重合としての人間の意識作用、思考の展開過程、そのありようをなぞる神話ストーリーを、「構造と変換」の視点からながめて解析をしている。

この視点は「人間の文化現象の多様性や変異を扱う文化人類学において有効であるだけでなく、様々な学問分野を横断する研究方法になって行くに違いないという見通し[2]」の中にあったと言う。

アメリカ先住民の神話が、その歴史の中で辿った変遷、構造変換の形式・論理性が、レヴィ＝ストロースによって、その重ね合わせらせつつのストーリーの構造が紐解かれ、人間の思考、象徴機能の展開課程が、アメリカ先住民の各神話の間のストーリーの変換過程の中に、

---

[1] 『レヴィ＝ストロース入門』P67 筑摩新書 265　2012 年 9 月 20 日

[2] 小田亮　『レヴィ＝ストロース入門』P63 筑摩新書 265　2012 年 9 月 20 日

「神話論理」として読み解かれ、示されていったと言えよう。

レヴィ＝ストロースは『神話論理』の中の各部族の神話ストーリー、その間の変換関係（暗喩、換喩、反転等）を、「隔たりの小さな二項対立を重ね合わせる」縮約、「その両端の性格をあわせもつ両義的な第三項「中間項」を入れる」媒介、中間性をもつ第三項を介在させるなどとして示し出しているのだが、それらはソシュールの言語論における「差異の二項対立」、その「網の目」というアイデアによっている。

1950 年、レヴィ＝ストロースの生涯の友ヤコブソンは、トルベツコイの音素の発見を踏まえて、世界中の言語音声を 12 対からなる弁別特性（二項対立）のセットとして整理をしているのだが、それはソシュールの言語の基本構造、その言語記号論の構造をなぞっていると言えよう。（**トゥルベツコイ**の主著『**音韻論**の原理』は死後 1939 年にプラハ言語サークルの論文集の第 7 巻として刊行されている。）

その「差異の二項対立関係」とは、人間の意識が、ある差異に気付く、「差異の感興」を抱き、自分をとりまくアモルフに広がる外界の中に生じたある差異の感覚、それは自分を取り巻く外界へのひとつの「解釈」・その開始点としての「差異の感興」であり、その「二項の対比」の形式をもって、あるいはその対比関係において、自らの感興を、その内容、指向対象が浮かび上がるといった、そうした「解釈」として、あるいは「認識形態」としての言語的な表象として理解されよう。

ある気付き、感興を抱いた人間の意識作用は、その「差異の二項対立」「対比関係」において、自らの指向対象を、言語音声の基本単位、音素の一筋の配列関係としての記号的単位「シーニョ」の内に、音声イメージ、言語的意味として抱えるものと理解される。その発語された「シーニョ」、その抱えられた意味のありようは、「差異の感興」の解釈として、各母国語言語集団の解釈であり、それぞれの世界解釈として各母国語集団毎に多様に異なっている。

人類は集団的な言語使用において、外界の在りようの中に差異を見出し、その「差異」、「差異」故の感興を、恣意なる「差異の二項対立関係」の組み立てをとおして、言語の単位、「音」と「意味」の一体的なつながり「シーニョ」を編み出しつつ、さらにその言語音声の揺らぎの中から新たな意味を揺らがせつつ創出せしめつつ、それらを集団的に浸透させ、敷衍させつつ、ラング（言語）の体系性を構築する地質学的な時間経過、言語の変換の過程を生き続けている。

その言語使用、言語的コミュニュケーション行為において、人間関係を、社会関係を、社

会文化性を生み出し深化させつつの人類社会であろうか。その中に生起した貧困不平等は、文化の状態に移行した人類的な社会の中で、文化的な広がりすべての領域にわたり、互いに影響しあって動き合う構造を成している。その社会文化性の淵源である言語的意味に係わる人間の精神機能、その展開の在りよう、その構造の展開課程を跡付けること、それは人間社会の成り立ち、その中の貧困不平等の構造と共にあるのではないかと思われた。2022/01224）

参照）旧ブログ　http://mirai21canal.com/

貧困概念と人間存在　レヴィ=ストロースを読む

はじめに、蝶番（ちょうつがい）

音韻論と変換と構造

婚姻規則(インセスト・タブー)の謎解き（加筆）

野生の思考から神話論理へ

神話論理の展開

神話の時間性と無意識

自然と文化

自然と文化の関係

文化人類学的に見る貧困概念

貧困の三角形

社会科学的な概念